

西村 淳一（イスラム文明史学）

イスラーム世界における地域概念の研究 ―モンゴル侵入以前―

本論文は、原典史料を駆使して、イスラム世界における地域概念のあり方を追求した労作である。

第1章では、「ソグド」の言葉が示す範囲を、アラビア語、ペルシア語地理書の記述の分析によって確定した。ソグド人の活躍はよく知られているものの、ソグド地方が厳密にどこにあたり、その範囲が時代とともにどう変化したかについては、本論文が世界で初めて明らかにしたもので、この章だけでも、歴史学に対する大きな貢献であるといえる。「ソグド」が縮小する傾向になったことが「ソグド人」の減少と関連があるとされたが、これは「ソグド人」とはなにを意味するかとともに、今後の課題として残された。

第2章では、都市メルヴをとりあげ、周辺部の農村、都市との関係を、都市との距離、移動に要する時間の面から、12キロ圏を「都市近郊」、30キロ圏を「メルヴ都市圏」、48キロ圏を「メルヴ地方」と分類する。都市からの距離と農村の数の相関では、6～12キロの間と24～30キロの間に大きなピークがあり、これをもとにした推論である。本章は、人の動きからみた「動的な都市と都市圏像」ともいうべきものを、具体的に史料の記述に裏付けられる形で提示したところに大きな意義がある。

第3章では、11世紀中葉に書かれた『ニスバ（地名等に由来する名前）の書』を利用して、人名の中に残っている地名を復元、ホーラーサーン地方とトランスオキシアナを中心に1161の村落、506の都市、117の「地域」、191の街区など、全部で約2000の地名を復元、提示した。また、一人の人間がどのような名前と呼ばれていたかを考察し、地方都市においては村落に由来する名で、大都市では地方都市で、遠隔地へ移住した後ではもとの地方の中心都市や通りのよい大都市の名前が用いられていた例を示し、個人の移動と自己認識、他者認識のありかたをも具体的なレベルで説明している。

第4章では、アラビア語とペルシア語の地理書の間で、使用されるタームがどの程度共通か、どのような違いがあるかを考証する。用語は、「山」「海」といった自然の地形に関するものから、「宿駅」、「内城」、「通り」、「井戸」などの生活、居住に関するものから、産物まで約100に及び、詳細を極めている。

アラビア語は、東アジア世界の漢文のように、広域に流通する共通文章語であり、ペルシア語は、東方イスラム世界で11世紀頃から使われるようになった文章語である。両者の間での流通範囲、対象、書き手の違いが、用語にどのように反映されているかは、極めて興味深い問題である。本論文では、一例をあげれば、「代理統治」「総督の管轄（地域）」の意味をもっていたアラビア語ウィラーヤが、ペルシア語地理書では、その意味からはなれて、単なる「地方」の意味で使われるようになり、アラビア語で様々に表現された言葉が、ペルシア語のウィラーヤに統合されたことを指摘している。これは、「地方」「地域」の概念についてばかりでなく、イスラーム世界における「統治」「徴税」「地方支配」といったもののありかたについて、歴史学の重要課題の根幹に関わる問題の提起である。今後、これを突破口として、さらに租税の書、年代記などの記述にも同様の分析の対象を広げることによって、大きな歴史像の展開につながることを期待される。

先行研究の問題点を十分認識した上で、史料を読みこなし、新たな知見と分析の結果を随所に展開した本論文は、独創性に満ち、学界に対する貢献度がきわめて高い。

よって本委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。